

【北海道民族学の投稿用に作成しましたが、インターネットに上げることにしました。査読を受けていないので、参考資料にとどめてください】

近世文献に見る北海道の鯨類利用

宇仁義和

はじめに

アイヌの鯨類の利用や捕獲に関する研究は、近世以降の文献を利用して考察が進められてきた。論文では利用した文献を手短に紹介するため、引用元の記述を直接見ることはできず、もとの記述を知るには文献を逐一参照することが必要であった。そこで本誌収録の「アイヌの鯨類認識と捕獲鯨種」執筆時に目をとおした文献について、アイヌの捕鯨や鯨類利用に関連する記述を抜き書きし、年代別に配列し若干の注釈を加えたノートを作成した。文献の選択は恣意的なものだが、北海道を実際に訪問して作成されたものに限定している。取り上げた活字本については、肉筆本や印影本の参照はしておらず、出版された書籍だけを利用した。

1. 1600年代の外国人による報告

・アンジェリスの松前訪問記録（チースリク，H. 1962. 北方探検記 元和元年に於ける外国人の蝦夷報告書。）

イエズス会士のジェロニモ・デ・アンジェリス Jeronymo de Angelis S. J. (1568-1623) は 1602 年に日本に到着、約 10 年を京都の伏見で過ごし、その後は仙台を拠点としたようである。北海道には 1618 年（元和 4）と 1621 年（同 7）に訪れ、松前地に滞在した。そのなかで蝦夷地やアイヌについても自分が直接見聞きした様子、そして伝聞を報告している（チースリク 1962：4-14）。

アイヌの鯨に関する記述は「アンジェリスの第二蝦夷報告（1621）」に 2 か所現れる。ひとつは北海道が島であるかどうかを考察した部分で「蝦夷にも海のように水量の多い且つ鯨も入り込む程の大きな河川がある故であります。そのわけは、蝦夷人達が松前へ売りに来る鯨が皆そのような河川で漁れるものだからでございます」（同 1962：91）とアイヌが鯨を河川で捕るという内容。もうひとつは松前に持ってくる産物の観察で「彼らの松前へもって来て売る商品は、乾鮭・鯨魚・白鳥・生きたままと乾かした鶴・鷹・鯨・海驢皮で、この海驢皮は安価で、多いときにはその一枚づつを五乃至六マスで売ります」と取り上げた産物 7 品目のうちに鯨が入っている（同：95）。

ポルトガル語原文では、それぞれ Digo assi, porque também em Yezo ha rios caudalosos como mar, e tão grandes, que nelles entrão baleas, porque os Yezojins, as baleas que tomão, e vem depois a vender a Matçumay, as tomão nos ditos rios（同：31）と As mercancias que trazem para vender a Matçumay são carazeqe, nixinno yuo, todonocava, que hé de pouco preço: quando muito cada dellas vendem cinco ou seis mases（同：35）で、鯨は前者では baleas が使われ、後者は kujiras を本文で使用し、注で balea と記している。

（うに・よしかず） 2012年9月3日掲載

・フリースの蝦夷地訪問（北構保男，1983，1643年アイヌ社会探訪記 フリース船隊航海記録。）

フリース Maerten Gerritsz de Vries (?-1647) はオランダ東印度会社所属のカストリカム船隊司令官で、1634年に択捉島と得撫島間のフリース海峡からオホーツク海に入り、樺太まで航海、帰りに厚岸湾で滞留した（北構1983：19）。本書では編者の解説と本文が交互に現れる。報告書のなかの鯨の記述は1か所あり、エリモ岬の西方に位置するマチマイという所から来た日本人についての描写で、彼らはアイヌとの交易のために来たのだが「この人たちは、毛皮・鯨油および油脂の取引きのために当地へ来たのであった」（同：111）という記述である。

付録資料として収録された「一六四三年、カストリカム号が訪れ、発見した、日本人がエゾと呼んでいる島、および同島住民の生活様式・習俗・習慣・知的能力に関する要約記録（要約記録）」には、厚岸の記事として「彼らの食物と栄養物は、魚・鯨の脂肪、魚油・野草・アッケイスには豊富にある赤いバラの実などである」（同：146）および「男子は、魚油。鯨の脂肪、燻製の鯨の舌、各種の毛皮、および鳥の羽根を、日本の住民と交換する」（同：147）という記述が、「ニコラス・ウィッセンが、カストリカム号下級舵手フィリップ・ジャコブ・ド・ベッカアより聴取した記録（ジャコブ・ド・ベッカアウィッセン記事）」にも「日本人は、商品として、ここに、斧、煙草、刀、および装身用の小間物をもってきて、毛皮、魚油、鯨の脂肪と物々交換する」（同：155）という記載がある。

2. 1700年代前半の文献

・著者不明「エトロフ島漂着記」（高倉新一郎編，1969，日本庶民生活史史料集成 第四巻 探検・紀行・地誌 北辺篇，pp387-400.）

1712年（正徳）に択捉島に漂着した船の生存者が、同地で見聞きした記録。鯨に関しては、「一、右の船は頭もともゝわけなく作り、鯨のひげにてあわせめをとぢ候」（高倉1969：6）、「木刀、鯨の髭の棒を持って散々に打合ひ候」（同：9）、「鯨の油など夥敷有レ之候、ゑぞより殿様へ上げ申候。鯨は九月より末に大分寄申候。鯨を取候ては切候て、石の上へのせ、火を焚き、油を取申候」（同：10）という記述がある。船の板を綴じるのに十分な長さでしなやかなヒゲであれば、このひげはセミクジラのものかもしれない。

・松宮観山「蝦夷筆談記」（高倉編1969：387-400）

1710年（宝永7）に来道した松前での聞き書き（同：387-388）。鯨に関する記述は「蝦夷地産物」の項に「鯨 石焼鯨 棒鯨」（同：392）とある。

・板倉源次郎「北海随筆」（高倉編1969：401-414）

1739年（元文4）成立。著者は元文2年に松前に渡り、蝦夷地の金鉱山5か所を視察した。行動範囲はわかっていないが、国縫から利別を結ぶ線以南と想像される（同：401-402）。鯨に関する記述は「蝦夷産物」の項に「鯨 石焼、かい鯨、棒くじら」（同：404）ほか、鯨におおよそ1項目をあてている（同：406）。

3. 1800年前後の記録

・松前広長「松前志」(寺沢ほか編, 1985, 蝦夷・千島古文書集成第1巻)

松前広長により1781(元明1)に書かれたもので、10巻からなる。第1巻は松前氏の系統と蝦夷概観だが、2-3巻は地理部、3-10巻は物産博物志とってよい内容となっている(寺沢ほか編1985:34)。鯨類に関する項目は「巻之五魚介部」にあり、クジラ、オキナ、カミの3つが立項されている(同:165-167)。

クジラ

即ち鯨、本名海魚或は■[魚偏に櫃の造り]の字を用ゆ。或は又海■[魚偏に酋]と云ふ。古はこれをイサナと呼べるよし、文字に勇魚とかけり。万葉集に伊沙奈これなり。是昔は箭を射て捕りたるの名也とも云ふ。或は戈を以て此魚をとりたるは古にはなきことなり。夷人は今も毒箭を放ち是をとる也。魚をナと云こと古よりならはしなり。松前方俗土民も海鮭をウミナと云うひ、河鮭をカハナと云ふ。桂南嶺と云ふものゝ記に尾州横須賀辺にて川魚をミツナと云より。是都鄙に古言の残ればなり。松前福山近海には大鯨なし。長こと拾丈許りを限りとす。然れども此物大小長短差別多き魚にして、海内を流通すれば決定しがたし。元禄年中日本肥前大村の銚を帯たる鯨松前に漂着せしことあり。東部キイタツプ辺より東北の夷人は、小舟を連れ、毒箭或は刃などを鏃となして射とる。誠に是夷地境内は海内中の六海国たれば、夷人に教て肥前なんどの如く大漁獵を興したらんには、永く国家の大産物たるべきなり。夷人鯨をフンペと云へり。此魚漂著せし処三年を過ぎれば鯨魚其海岸に群遊することなし。故に海夫忌てエビスと称す。故に其地によつては鯨獵を第一となさしめたきことならずや。

オキナ

夷方大鯨をオキナと号し、神のごとく畏れ崇ふ也。文選に介鯨あり是乎。華木の三才図会に、崔豹が古今註を引て云、鯨大者長千里と、是即ちオキナなり。和漢三才図に崔豹が説甚だ妄也と、是却て管見の説也。尋常の海鯨に数十倍あるを紅毛人ワルヘスと云よし。中華にこれを海翁と云へり。さればオキナは即ち海翁の意にて、方俗の名けたるなるべし。夷人実はこれをヤツインゲと云へり。此物夷地東北海洋中にあり。此魚海上に浮ばんとせば、二三日已より海水自然とくろみわたり、大洋肅然たり。其時夷人舟をかくし戸ををさして、畏れつゝしむこと甚し。其形を顕はすときは、忽然として大山の突出せるが如く、日を経て退かず。時に風波の動揺すること夥し。其大なるは数十里にわたり、海水これが為に溢るゝ如しと云へり。莊子に北冥有レ魚其名爲レ鯨、鯨之大不レ知二其幾千里一也と。然則大洋海中如何なる海獣大魚あらんもはかりがたし。異物志に雄者爲レ鯨、雌者爲レ鯢、其大者亦然。或死二於沙上一、得レ之者皆無レ目。俗云其目化爲二明珠一、蓋其死有り二彗星一応レ之と。これを以て其奇魚異物たることを知るべし。五雜俎中神異経の説あり、見るべし。元禄五年壬申夏五月西部シマコマキの蝦夷オキナの牙を領主へ呈せしこと旧記に見へたり。惜哉其形を記せざるなり。

カミ

此魚大洋中にあり。夷方これをフンペと云。カミとは方俗の称せる也。白石これを剣魚とす。東部シブサリ辺の蝦夷はこれをシイタムコルベと云。此魚群りて生鯨を食こと禽獸に虱の生ずるが如しと云。又舟をもくひきると云へり。鱗ありて逆立り。大鯨もこれが為に死して海浜に

漂著す。方俗これをカミキリ鯨と云。甚大なるは一文にちかし。按るに是即ち鷗尾（シヤチホコ）なるべし。今魚虎をシヤチホコと訓ずるは非なりと篤信云へり。或云シヤチホコは竜頭魚なりと、未レ詳。或云、此魚小魚なりと、疑くは誤りならん。夷地東部アツケシの蝦夷カミ魚の牙なりとて所持せるを予求めたるに、小物にはあらざるなり。

・平秩東作「東遊記」（高倉編 1969：415-427）

1783-1784年（天明3-4）に江差に滞在したときの聞き書き。鯨に関する記述は次のようなものである。

油とる江豚（いるか）おほし。蝦夷人このものより油をとり、三湊とも魚の油を用ゆ。樽につめて餘國へも出するといふ。海鱈（くじら）は多く見ゆれども、ゑびすとよびて捕ることなし。此ものにおわれて鮓あつまる故なりといへり。乍レ去一兩年不漁なるは、此魚磯ちかく出る故、鮓おそれてよらずともいふ。蝦夷地の北方にては、海潮氷る時、此魚自ら死するを切りとりて油をしぼり、又食事に用ゆ。カイクジラとて船のかいの如くなる干くじらをうる。鬚もり物にあり。先年ヨクシリという嶋にて岸のくづれた所より死したる海鱈をほり出したり。年數何ほど立たるといふ事はしれざれども、是をくらふに味かわりたるなし。油多くてたやすく朽ぎるものにや（同：430）。

・最上徳内「蝦夷國風俗人情之沙汰」（高倉編 1969：439-484）

1785-1786年（天明5-6）に行われた北海道から国後、択捉、国後島までの調査の記録。異名本に「蝦夷草紙」がある。鯨に関しては「産物の事」の項に
イルカ ヲゴン、テンケチロンノブ、レブンカモイ、トワユク、コシコンブ、イカラカモイ、ネハイコイキカモイ、イチムケ、フンベコイキ、九種類皆イルカなり。
鯨 ノコル、ドナイ、フレンベ、タンエベ、ユクンベ（ヤヲヌンベ）、ヲキナケンベ、イドチケレ、ヲアカウシ、凡九種あり。皆鯨なり
という記述がある（463p）

・串原正峯「夷諺俗話」（高倉編 1969：485-520）

1792年（寛政4）、松前から日本海岸を通って宗谷に至り、千歳越えで戻った旅の見聞録。翌年完成。鯨に関しては「鯨の事」として次の記述がある（同：515）。

鯨の事

蝦夷地の海に鯨多し。予も度々鯨の汐を吹を見たり。船へ間近く来る時は、舟中のものヲエベスへ（くりかえし記号）と聲を立る。鯨を見付ても船中にては鯨といふ事をいみ言葉にて、右のことくいふ事なり。夷言にはフンへと云。鯨にも品々あり。左のごとし。
クタルンベ イツチケシ イ、ルコトナイ タンネンベ ユクンベ トナイフンベ シドフイ ヲワカフシ イシヨホンベ ニセフンベ チエフンベ ホンホロンベ ホロフンベ アイノフンベ ヲキルケ

此内フーレンベというは一名チカフンベともいふ。此鯨よりは赤き油出るよし。ユクンベという鯨には腹に鹿の足あとのことき形有となり。トナイという鯨の腹には畦溝のことくなる所あるよし。鯨十七品ある内にヲキルケ斗り歯あるよし。

ユクンベに「鹿の足あとのことき形有」とはダルマザメがかじったあとがゴルフボールくらい

の白い斑点になり、体表に散在している様を現しているのかもしれない(宇仁 2012:21-22)。

・最上徳内「渡嶋筆記」(高倉編 1969:521-543)

1808(文化5年)の著作。鯨に関しては鳥獣を捕る弓に関して「弦は鯨魚の筋を用れども、なければ木皮又麻をよりあはせて作る」という記述がある(同:534)。

・秦憶丸撰 村上貞助・間宮林蔵増補「蝦夷島奇観」(秦 1982)

図絵にはアザラシの捕獲、トドの捕獲、オットセイの捕獲は見られたが、捕鯨の様子は記録されていない。海生哺乳類の捕獲や利用は和人にとっては奇異に映ったと思われ、トドやオットセイの捕獲、アザラシ毛皮の品質について解説が加えられている。

・菅江真澄「えぞのてぶり」(内田武志・宮本常一編, 1971, 菅江真澄全集 第2巻、菅江真澄(内田ハチ編), 1987, 菅江真澄民俗図絵 上。)

菅江は1788年(天明8)に北海道に渡り、1792年(寛政4)まで松前を拠点に東西蝦夷地を旅して歩いた。「えぞのてぶり」は1791年5-6月、松前の福山から噴火湾沿い進み、有珠岳登山までの日記である(内田・宮本 1971:483-486)。鯨に関する記述は、噴火湾でのイルカの様子を挿絵入りで記している。(内田・宮本編 1971:126)

こゝらの黒魚(タンヌ イルカ)、沖もせに群れ行くがあらそひ、波を離れて五六尺斗も飛あがるを見て、ハナリ撃てんとアリンベ(一本銚)にギテキ(銚頭)てふものをさし、アキドスとて細き縄をギテキに付て、柄(カラ)もひとつにとりもて、ぬかにこれをさしかざし、たちねらふにおぢて、浪のそこにしづみかくろうを見て、あなねたしとて船追ふ。

挿絵の動物はイルカとも大型魚ともつかないが、全体的にはカマイルカの印象が強い(宇仁 2012:17-18:)。

・蝦夷の嶋踏(板東曜子編, 2002, 近世紀行文集成第一巻 蝦夷篇。)

キテ、アザラシ、ラッコ、オットセイの図はあるが、鯨類はない。

・谷元旦「蝦夷記行図 上」(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

1799年(寛政11)の著作。鯨に関しては「イルカの魚を食」と注記された図がある(「北海道大学北方関係資料総合目録」<http://www.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/>の「蝦夷記行図上」

<http://www.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/kyuki.cgi?id=0A003110000001000&title=蝦夷記行図%20%20上%20%2F%20谷元旦&page=1&lang=0>では6ページ目 2011.12.9閲覧)。分布と形態からゴンドウ類を描いた可能性が指摘されている(宇仁 2012:18)。

・松田伝十郎「北夷談」(高倉編 1969:77-175)

松田は1799年(寛政11)から1822年(文政5)まで蝦夷地担当の幕吏であり、その間に蝦夷地で経験・見聞したことの記録である(同:77)。鯨に関する記述は択捉島紗那での聞き書きとして「川ありて舟利能く、鯨は寄鯨を以(て)産物とす。年々場所中にては五本、八本、又は十本と寄ることあり。大なるは十尋以上にして、小なるは五、六尋なり。鹽に漬て樽詰め又は筵包なり。本邦へ運送す」(同:101)とある。寄鯨の数が年間5-10本というのはたいへ

ん多い数である。

4. 幕末の紀行など

・窪田子蔵「協和私役」（高倉編 1969：223-270）

窪田は安政3年（1856）、箱館から西海岸を北上し、宗谷からオホーツク海沿岸を南下して北海道を一周した。そのときの日記である。鯨に関する記述は「西北洋夷人東洋に來り鯨鯨を捕る是なり」（同：241）とあり、アイヌの捕鯨については記述がないが、西洋人が来て捕鯨をしていることを指摘している。

・秦憶丸撰 村上貞助・間宮林蔵増補「蝦夷生計図説」（高倉編 1969：521-543）

1823年（文政6）成立。鯨を直接描いた図はなく、ひげからの製品として船を作るときに板を結び合わせる縄「テシカ」の「一種は鯨のひげをはぎて其儘用ゆ」（高倉 1969：574）として紹介されるにとどまる。

おわりに

北海道の近世文献では鯨類の利用や捕獲に関する記述はさほど多くはない。しかし、こうして年代別に近世文献を配列してみると、古い時代のものほど詳しく、その文献内での相対的な比重が高いように見える。近世後期では組織的漁業の比重が盛んになったことで、野生動物の狩猟から得られる産品が相対的に重要性をなくしていったと考えられる。それはアイヌによる寄鯨の製品化の機会の減少、加えて鮭漁、つまり鯨類捕獲に従事する時間や人工の減少を意味しているのかもしれない。

引用文献

板東曜子編

2002 『近世紀行文集成第一巻 蝦夷篇』，葦書房

内田武志・宮本常一編

1971 『菅江真澄全集 第2巻』，未来社

宇仁義和

2012 「アイヌの鯨類認識と捕獲鯨種」『北海道民族学』8：16-26，北海道民族学会
菅江真澄（内田ハチ編）

1987 『菅江真澄民俗図絵 上』，岩崎美術社

北構保男

1983 『1643年アイヌ社会探訪記 フリース船隊航海記録』，雄山閣

高倉新一郎編

1969 『日本庶民生活史史料集成 第四巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』，三一書房

チースリク，H

1962 『北方探検記 元和元年に於ける外国人の蝦夷報告書』，吉川弘文館

秦憶丸

1982 『蝦夷島奇観』，雄峰社